

特別な友だち

小浜ユリ
沢田真理・え



うららかな陽気の、春休みの昼下がりがだった。
ママからとつぜんの、非常事態宣言。

「こんどパパの転勤で、引っ越しすることになったから」
「引っ越し？」

なにかの冗談でしょ、と、わたしは思った。

そんな話は聞いてない、というと、ママは天使のような
笑顔で、悪魔のようにそっけなく答えた。

「だから今、話してるでしょ」

ムリ！ ムリムリムリムリ、ぜったい無理〜！

わたしの激しい抵抗も、あっさりと却下された。そんな
こと、わかってはいたけれど。

「中学に入る前で、ちょうどよかったじゃない」

なにがちょうどよかったのか、まるでわからない。でも
考えようによっては、いいチャンスかもしれないと、わたし
は思いなおした。

中学に入ったら、人生をリセットしようと思っていたの。
別に今までの人生が不幸だったわけじゃない。ただ、いろ
いろなすべてのことを、新しくやりなおそうと思っていた
から、ちょうどよかったというママの言葉は、意外と当た
っているかもしれない。

小学校時代は、それなりに楽しかった。わたしは明るい
性格だったし、おバカなキャラを演じていたので、友だち
も多かった。いつも数人でわいわいするんで、アイドル